
Quarterly "Urbanization" 2019 vol.1

季刊「都市化」2019 vol.1

「梅原猛の人類哲学」

公益財団法人 都市化研究公室理事長 光多長温

2019年4月

公益財団法人 都市化研究公室

Research Institute of Urbanization

本レポートは原則として発表時における情報に基づき作成されております。
内容についての問い合わせは、当財団事務局までお願いします。

梅原猛の人類哲学

2019年4月

公益財団法人都市化研究公室理事長 光多長温

目次

| | |
|--------------------|---|
| 1. はじめに..... | 1 |
| 2. 梅原哲学..... | 1 |
| 3. 梅原哲学から見る現代..... | 4 |

1. はじめに

梅原猛氏¹（以下、梅原という）が亡くなられた。

日本仏教や古代日本の研究を行い、日本人論、日本文化論について独特の世界を展開して、「梅原古代学」「梅原日本学」といったものを創り上げ、その言動は常に世間の注目を集めた。「古事記」神話や法隆寺建立、更には柿本人麻呂に関する独特の解釈を展開し、既存論説層から常に批判の対象となった。また、出雲宗教に関して緻密な現地調査に裏付けられた独特の論を繰り広げたことでも知られる。

筆者は梅原の業績で最大のものは、晩年になって打ちたてた「人類哲学」であると思う。梅原は、デカルト、ニーチェ、ハイデガー等の西洋哲学を人間中心主義哲学として批判し、自然と一体的な哲学、その神髄として「草木国土悉皆成仏」を根本思想とする新たな人類哲学を打ちたてた。

梅原哲学を「世界を包含する人類哲学」と位置付けることには各界から未だに異論があるのも事実である。しかし、「全人類に通用する人類哲学」かどうかは、別として、新たな日本哲学を打ちたてた（これにも異論があるのも事実であるが）ことは大きな業績だと思う。現に、梅沢は、デカルト哲学等の西洋哲学を、日本の哲学者が「人類普遍の哲学」としてそのまま日本に適用していることを批判しているのであり、必ずしも西洋哲学そのものを批判してはいない。

2. 梅原哲学

梅原の人類哲学の根本思想は、「草木国土悉皆成仏」である。これは天台本覚思想の基本で、発想者は良源である。本覚とは、「本来の覚性」の意で、一切の衆生に本来的に具有されている悟りの智慧を意味するものである。「衆生は誰でも仏になれる」、あるいは、「人間はもともと仏性を具えている」という意味である。

¹ 京都市立芸術大学教授・学長、国際日本文化研究センター所長（初代）等々を歴任。

以下、異次元のスケールと奥深さを持つので、筆者の力の及ぶところではないが、梅原の人類哲学の主張を国土論・地域論的視点から見てみたい。

ヨーロッパ文明は人間中心に考える文化であるが、日本文化は植物中心の文化である。西洋のように過去と未来があって、現在という時間が過去と未来の接点、そうした神秘的な接点があるということではない。自然の時間は、春夏秋冬という季節のことである。そうした季節感を最も良く表現するのが植物であり、その植物中心の世界観が人類哲学の基本となる。

日本の自然観は基本的に縄文文化から来ている。日本の縄文文化は世界の狩猟採集文明の中で最も発展した文明で、日本文化は農耕・漁労採集社会を背景に持つ。植物文化、農耕・漁労採集社会の文化が連綿と続いている。

この植物文化の特徴は、第一に、「繰り返し」である。即ち、春夏秋冬を毎年繰り返す。永劫回帰とは繰り返す時間のことをいう。ヨーロッパのように、大きな季節変化がない地域では繰り返しの文化は見られない。皇室で数百年にわたって丁寧に繰り返される儀式、春の桜見物、冬の雪景色、これらを毎年繰り返して、挨拶も季節に関連した対話が多い。「繰り返すことに価値を見出す文化」である。

第二に、人間、死ねば、皆、仏になる。生者はお墓に手を合わせて祈る。中国やヨーロッパでは「死者は成仏する」という考えを取らず、墓を暴いて死者を鞭打つことさえやる。また、ヨーロッパにおいては、王様の棺に手を合わせることなく、一般の人が棺の間近かで見物する。これに対して、日本は天皇のお墓を見ることは許されない。

仏になるという「成仏の思想」が鎌倉仏教の共通の前提となった。この理由は縄文文化にある。山も川も生きている。植物や動物ばかりでなく、山も川も生き物と考える。アニミズムである。東北大震災の時に、東北の人が「死にそうな人、死んだ人から助けてください」といった他己的な行動をとったことも、これに起因するのかもしれない。

第三に、自然への恐れ、自然への敬い、自然への服従である。日本の神は太陽（ヨーロッパは月）。天照大神は太陽の神。日本の神様の中心も太陽。農業社会の信仰の中心は太陽である。これと同じく、太陽を神としているのが、エジプトとマヤ文明。長江文明も太陽神が中心。農耕文明になると、アニミズム的なものも残るが、その上に太陽が来て、太陽の神が中心となる。日本の神は太陽神、太陽の神は大日如来、水の神は観音である。稲作農業にとっては、太陽と水が神となる。弥生時代になってから始めて太陽と水を神とする考え方が強まった。

ヨーロッパや、中近東のような自然条件が厳しいところ、砂漠や森から出たところ、また交易等、海洋での生活を楽しんでいる人々、こういう厳しい自然の環境に

置かれた人々は太陽信仰とか多神教的な考え方を離れて何よりも絶対的な中心のようなものが欲しくなる。そこに一神教的な信仰が生まれる風土がある。これに対して、わが国のような自然条件がそれほど厳しくない（農業狩猟が可能な）地域では多神教的な状態が続く。

西洋科学はそういう一神教的な風土の中で生まれた。一神教は、唯一神を信仰することであることから、統一的普遍法則（神の意志）を発見したが²。ここから必然的に科学的思考が生まれ、「科学」が生起する。西洋哲学のルーツはデカルトである。デカルトは、「我思うゆえに我あり」と述べるが、考えるということは自然支配につながる。日本人は、自然は人間の手に負えないと考えるが、デカルトを起源とする西洋文明においては、自然は奴隷のごとく人間に使われるようになる³と考える。

西洋文明は科学を成立させた。しかし、問題は自然を支配できるという考え方である。西洋では科学を発展させることにより自然を支配できるという考え方を取る。これに対して、多神教の世界では、自然は怖いもの、海も津波も怖いもの⁴と考える。他方、自然は大きな海の幸をもたらす。そうした両面を持っている、これが多神教の世界である。

Civilization を文明と訳したのは福沢諭吉である。それまでは文明とは、ハードな制度、組織、装置等をいうもので、精神（考え方）は文明ではないという考え方が強かった。これに反して、福沢は **Civilization** を文明と訳した。そして、文明とは「精神発達のプロセス」とした。しかし、明治維新以降の日本は、文明の精神をどこかに置き忘れてきてしまった。文明の精神を置き忘れて、物質、エネルギーを文明の中心としてしまった。

日本の縄文時代は1万年以上続いた。エジプトも3000年以上続いた。なぜ、3000年以上も続いたのか、そのメカニズムが大事である。ヤスパースによると、世界の文明は紀元前5世紀くらいが文明の分岐点で、釈迦や孔子やソクラテスが出て、そして、イスラエルにはイエスの先駆者と言われる第二イザヤが出た。アクセンチュア（枢軸時代）という、世界史の攻防を左右する思想が生まれた。

縄文文化は基本的に狩猟採集文化である。縄文の日本においては、特に狩猟採集文化が発達した。ただ、日本の狩猟採集文化は漁撈採集と言った方が良い。特に、東日本ではサケ、マスが遡上する。これを捕まえれば命はつながる。日本は狩猟（漁撈）採取文化が世界でも最も発展した国の一つであり、日本人は、刺身などの「生もの」が好きである。狩猟文化の考え方、これはアニミズムである。森の文化も生

² 多神教においては、具合が悪ければ別の神に替えても良いという思想となる。

まれる。それから、全てが神という考え方が出てくる。決してナショナリズムにはならない。国という単位を超越して世界的となる。これに対して、ヨーロッパの「二つの源泉」ともいべきヘブライズムとヘレニズムは、思想的に自然を疎外する思想となった³。

3. 梅原哲学から見る現代

梅原哲学から、現在の諸事象を、思い巡らせてみたい。

第一に、梅原は、梅原哲学を「人類哲学」とする。梅原哲学は真に日本哲学を超越して、ヨーロッパを含めた人類哲学となり得るのであろうか。梅原がいうことは次の点である。ヨーロッパ文明は人間中心、利己主義中心、科学技術、市場経済をベースに考えることを特徴とする⁴。そこから、人間哲学（自然ではなく人間中心の哲学）が出てくる、その結果、最終的には人間が科学技術、経済原理に支配されてしまっていると指摘する。

梅原は、現在のヨーロッパの文明は行き詰っている、それを克服する原理は日本の思想の中にあるとする。日本思想の中核は自然と人間との一体化、同一化であり、これは持続的、普遍的であるとする。それは単に日本の思想に留まることなく、人類の原始的な思想に立ち返ってそこから文明がどう変わったか、文明の持つプラス面とマイナス面を斟酌して新しい哲学を考え、新しい哲学となり、そこから「人類哲学」につながって来るとする。

壮大な思考スケールである。「科学も文明も市場経済も自然の中に取り入れることが可能か」等の様々な議論があるであろうが、その思考スケールは余りに壮大で、とても筆者が論を挟む余地はない。100年後あたりに多少の予兆が出てくるのかも知れない。

第二に、日本文化の原点が縄文文化であるという点である。特に東北地方に縄文文化が色濃く残っている感がする。民話で見ても、例えば、柳田國男の「遠野物語」に見るように、自然と動物と人間とが一体化している民話がしばしば出てくる。これに比べて、西日本の民話は、弥生式文化の色彩が強く縄文的特徴はやや薄い感がする。人間中心の物語、それも庶民の物語が多い。地域差があるということかも知れない。この点は様々な議論があるところであろう。

第三に、梅原哲学の根本思想である「草木国土悉皆成仏」の延長線上かも知れないが、欧米人は人間中心主義、日本は自然主義であり、日本では成仏した人（死者）

³ やはり、梅原哲学の異次元性を痛感する。散発的にしか述べられなかったことは筆者の能力不足に起因する。

⁴ 市場経済は利己主義的な考え方の下に成り立つとする。

を生きている人よりも一段上に見る傾向がある。身分等を問わず、死者は成仏したものと見なされる。欧米や中国で憎い相手や罪人で墓に埋葬されているものを暴き出して処罰を加えるような行動と対照的である。また、大災害において、欧米では助かる可能性がある人から救助するのに比べ、日本は亡くなった人や亡くなりそうな人から救助を行う文化が残っている感がする。

第四に、縄文文化の特徴である「自然への恐れ」「自然への服従」等から見るような自然災害への対応である。日本人は、欧米人に比べて、自然への恐れ、自然への服従の度合いが強く、自然災害を仕方がない、やむを得ないとして受け容れる面が強い。これは大災害に対する防災のあり様についても現れる。欧米の災害対策の基本的考え方は「自然を克服」することに対し、わが国においては「自然を克服する」という観点は極めて弱い。これは日本の国土の地震、津波、水害等欧米よりも厳しい自然条件、地盤条件であることもその要因の一つを成しているのかも知れない。この「自然災害への諦め」は、防災よりもむしろ事後復興に重点を置く傾向があることにも繋がる。

元国土交通省道路局長・国土交通事務次官で、現、芝浦工業大学工学マネジメント研究科客員教授の谷口博昭氏は、土木工事について興味深いことを話されている。

「わが国のような脆弱な国土、地震、自然災害が多い中では、自然を克服すると考えることは、却って大災害を招く。自然とどう『手を握る』かが重要だ。」土木工事の現場で陣頭指揮を執って来られた方の弁として重いものを感じる。

第五に、梅原がいう「繰り返しの美」である。わが国は、宮中の行事等も数百年間、同じことを丁寧に繰り返す。また、針葉樹よりは落葉樹を好む傾向がある。これは日本人の自然意識と合致する。即ち、同じことの繰り返しである。しかし、四季があるため、季節感があり（「移ろう美」）同じことを繰り返すことも単調とはならない。むしろ、繰り返すことにより歴史の重みが加わり深みが増す。この「繰り返しの美」は都市における建築物の建て替えの考え方にも繋がることも考えられる。ヨーロッパでは一度作った建物をそう簡単には壊さない（建て替えない）。わが国では、一定期間毎に「建て替える」⁵。これも繰り返しの美の反映であろうか。

いずれにしても、強烈な梅原文化を主張してきた梅原が亡くなったことは誠に残念である。改めて壮大なスケールの思想を持った人物であることを痛感する。

（以上）

⁵ 一例であるが、新築住宅戸数は、ドイツで約450万戸（1996年～2016年の20年間）12.6%に対し、日本は、1,480万戸（1993年～2013年の20年間）32.1%の増加。また、ドイツの2016年の新築住宅許可件数32.3万戸、同年の日本の新築住宅着工件数は97.4万戸と約3倍となっている。